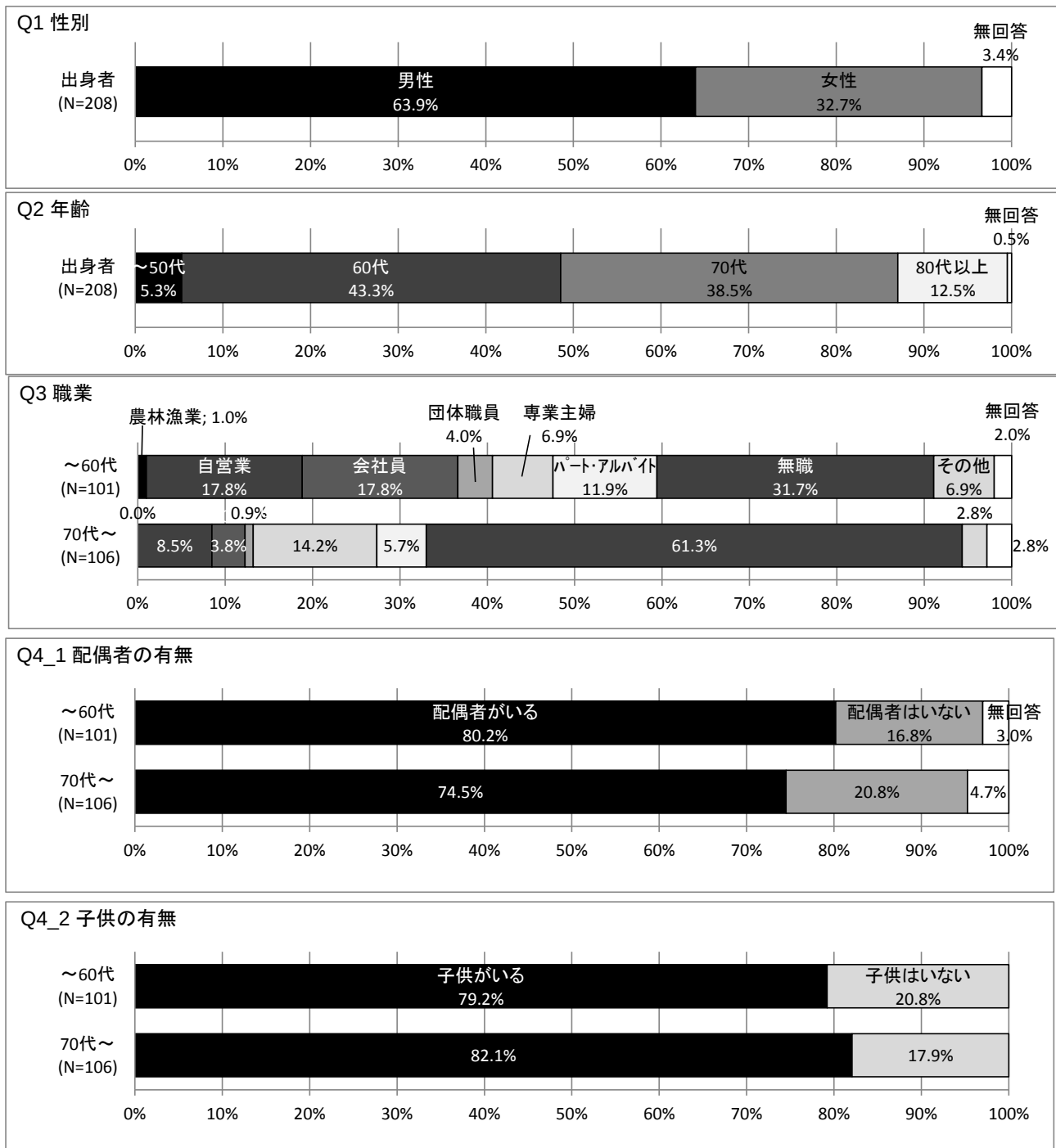


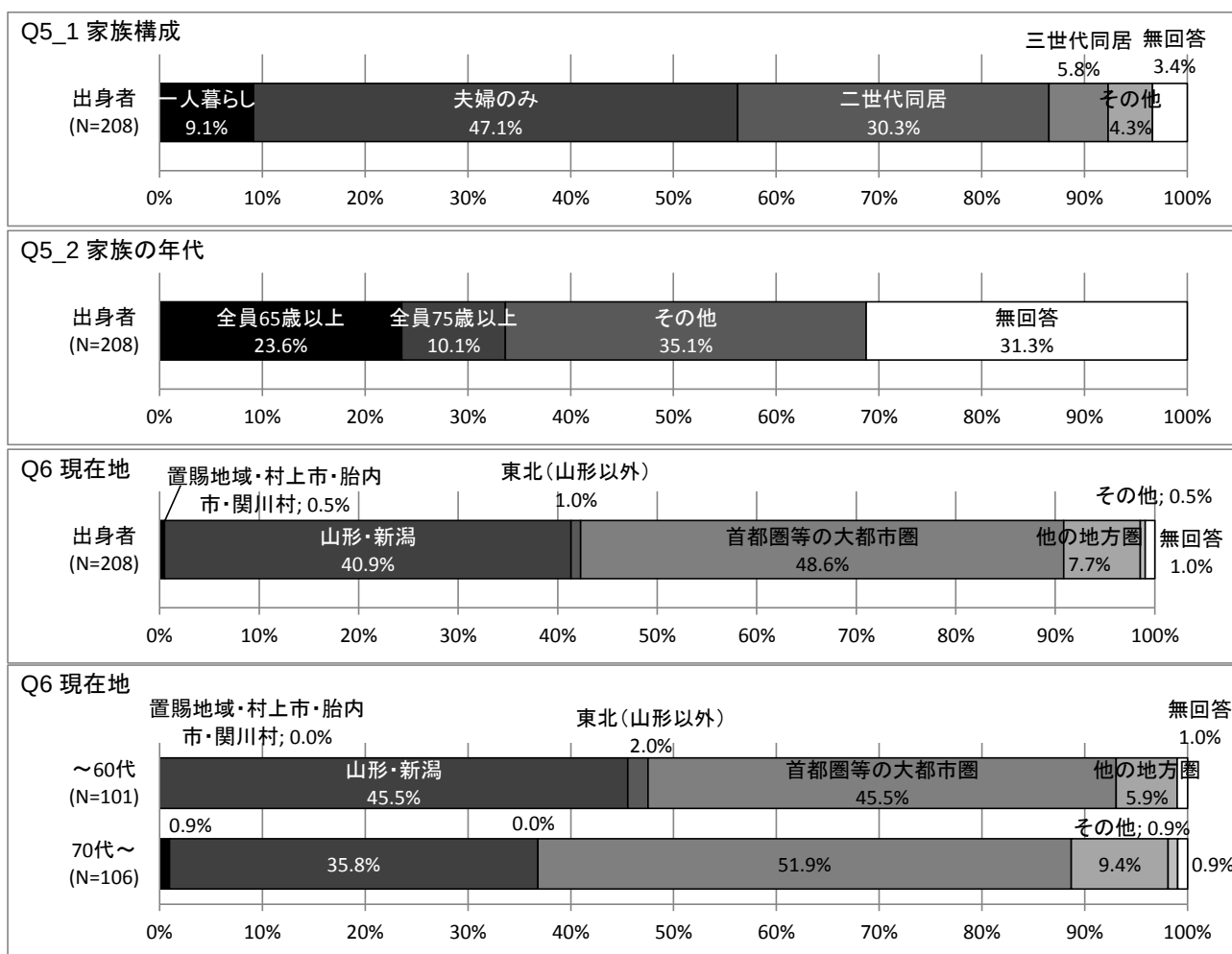
2-3. 町出身者アンケートの結果

(1) 回答者属性

- 回答者は男性が6割超を占めており、年齢構成は60代以上が大半を占めている。
- 回答者の職業をみると、60代までは「自営業」や「会社員」も2割弱みられるが、70代以上は「無職」が6割以上を占めている。
- なお、配偶者や子供がいると回答した人が大半以上を占めている。



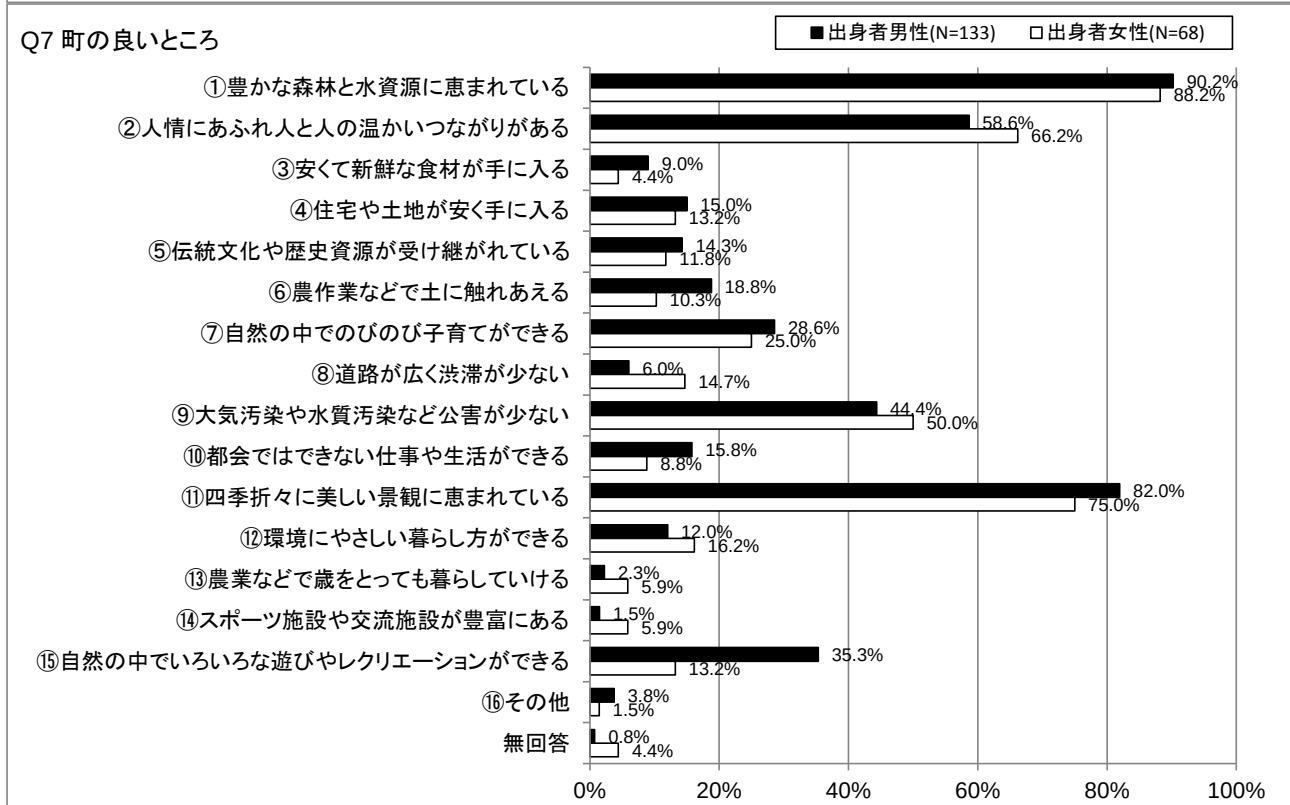
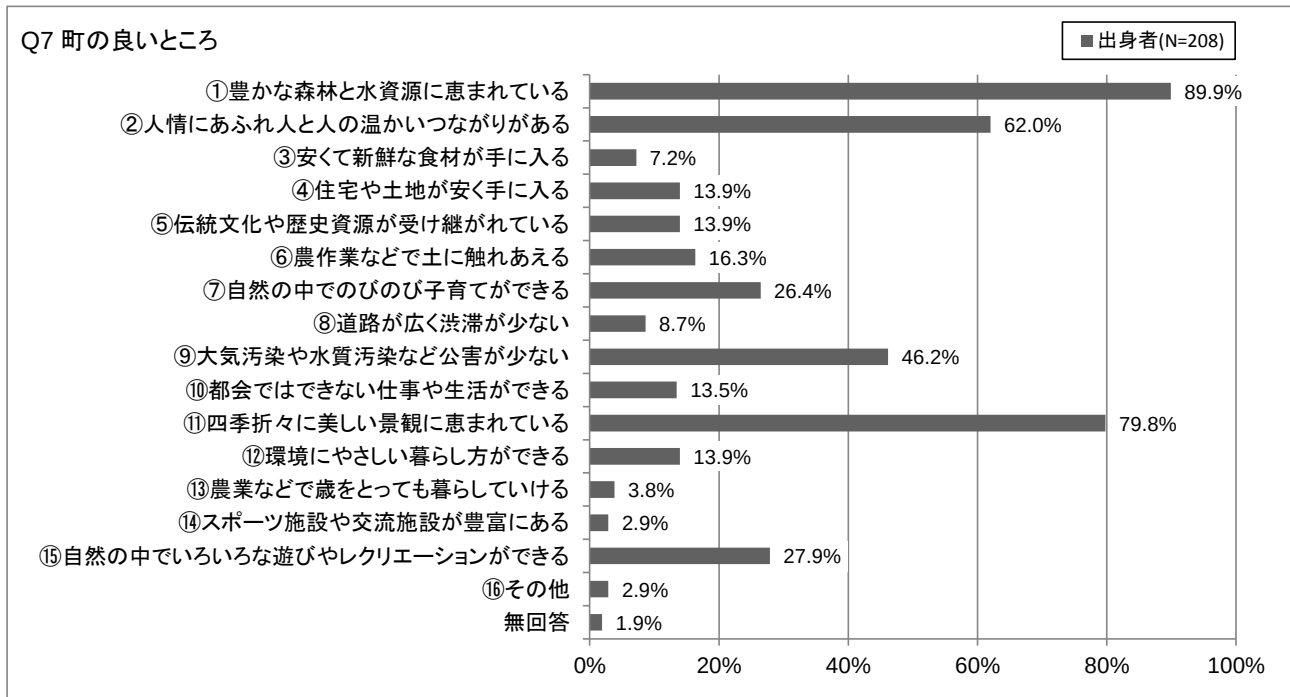
- 回答者の家族構成をみると、「夫婦のみ」が5割近くと最も多く、次いで「二世代同居」が30.3%であり、「一人暮らし」は1割に満たない。
- 現在の住まいをみると、「首都圏等の大都市圏」が約半数を占めており、次いで「隣接市町村以外の山形県・新潟県」が約4割である。
- 現在の住まいについて60代までと70代以上で比較すると、60代までは「隣接市町村以外の山形県・新潟県」に住んでいるケースが多い一方、70代以上では「首都圏等の大都市圏」が5割以上を占めている。



(2) 小国町の魅力・イメージ

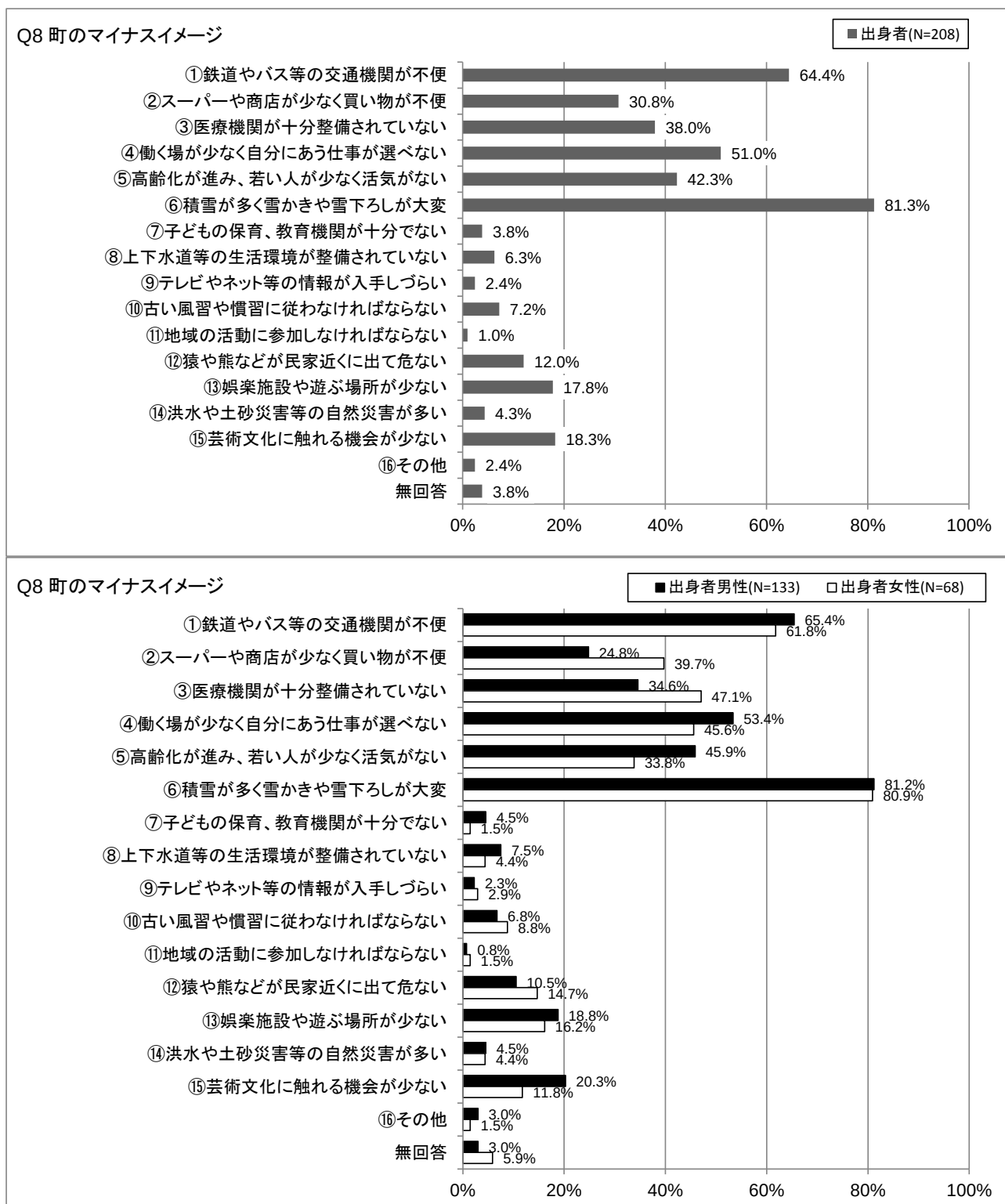
Q7 あなたにとって、小国町の良いところは何ですか。(〇は5つまで)

- 町出身者は特に「豊かな森林と水資源」及び「四季折々に美しい景観」に町の魅力を感じている。
- 性別で比較すると、自然環境を評価する声は男性の方が女性よりも多く聞かれる。一方、女性は「人情にあふれ人と人の温かいつながりがある」点をより町の魅力として感じている。



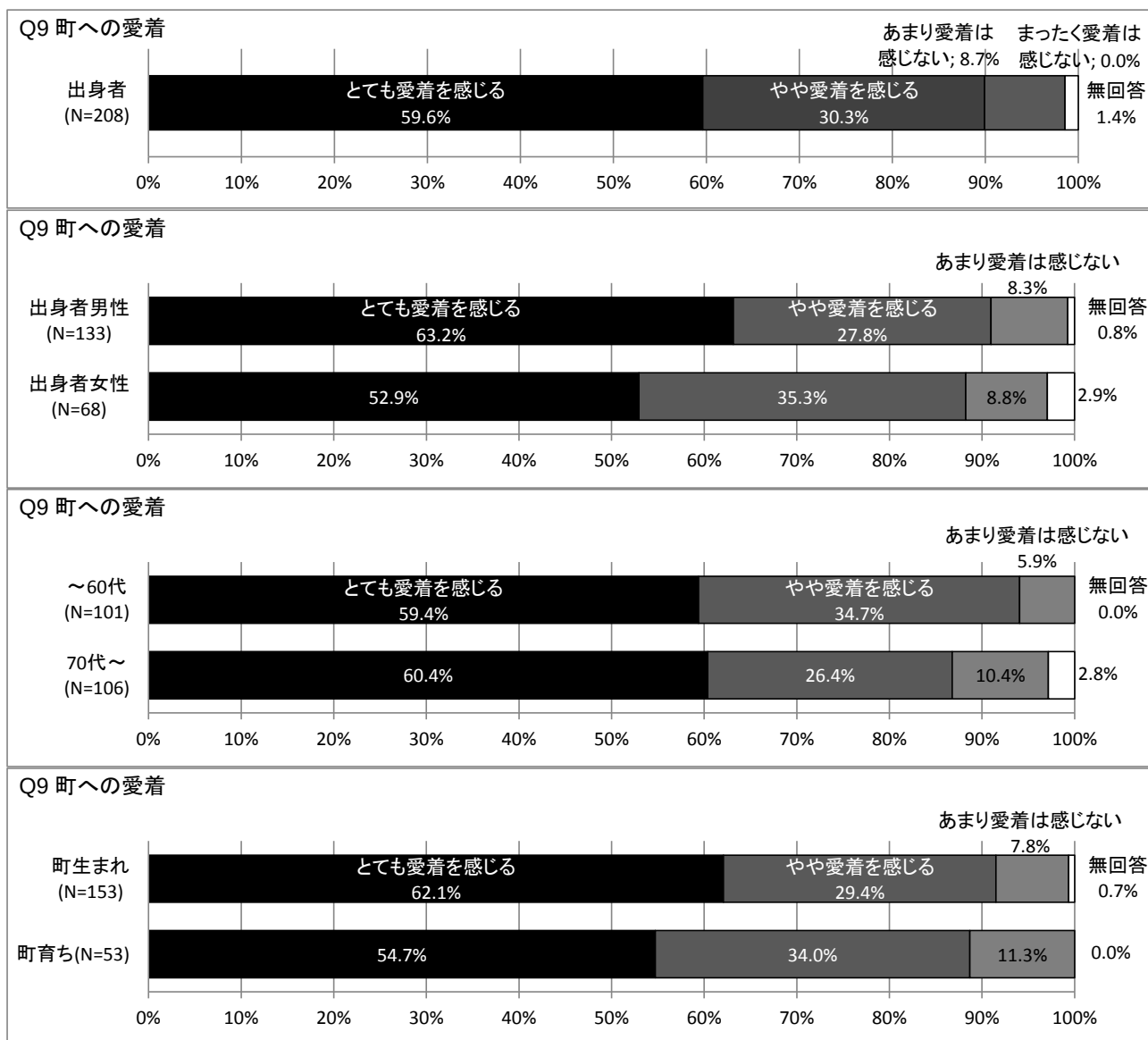
Q8 あなたは、小国町にどんなマイナスイメージをお持ちですか。(〇は5つまで)

- 町のマイナスイメージについては、「積雪が多く雪かきや雪下ろしが大変」が8割超と最も多くから挙げられており、次いで「鉄道やバス等の交通機関が不便」が約65%と、この2項目が特に高い割合となっている。
- 上位2項目以外について性別で比較すると、男性からは働く場がないことや若い人が少なく活気がないことが、女性からは買い物不便さや医療機関の不足がより多く指摘されている。



Q9 あなたは、小国町に愛着を感じますか。(〇は1つ)

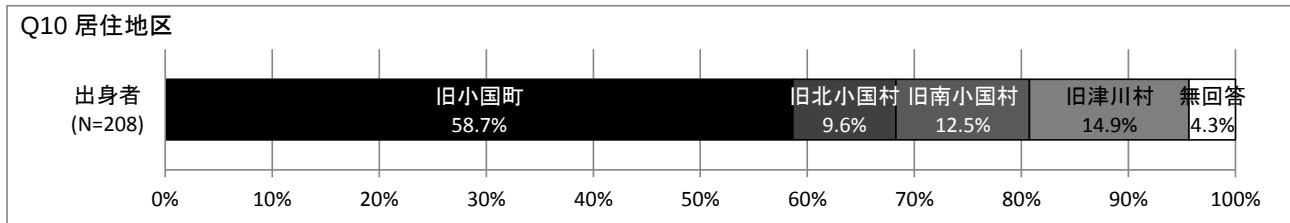
- 町出身者の9割が「小国町に愛着を感じる（とても感じる+やや感じる）」としている。
- 性別で比較すると、男性の方が「とても愛着を感じる」とする割合が高く6割を超えている。
- 世代でみると、70代以上は「あまり愛着は感じない」が約1割みられる。
- 町に住み始めた時期（後述）とのクロスでみると、町生まれの人の方がより強く愛着を感じて居ることが分かる。



(3) 小国町との関わり

Q10 あなたがかつて住んでいた地区はどこですか。(〇は1つ)

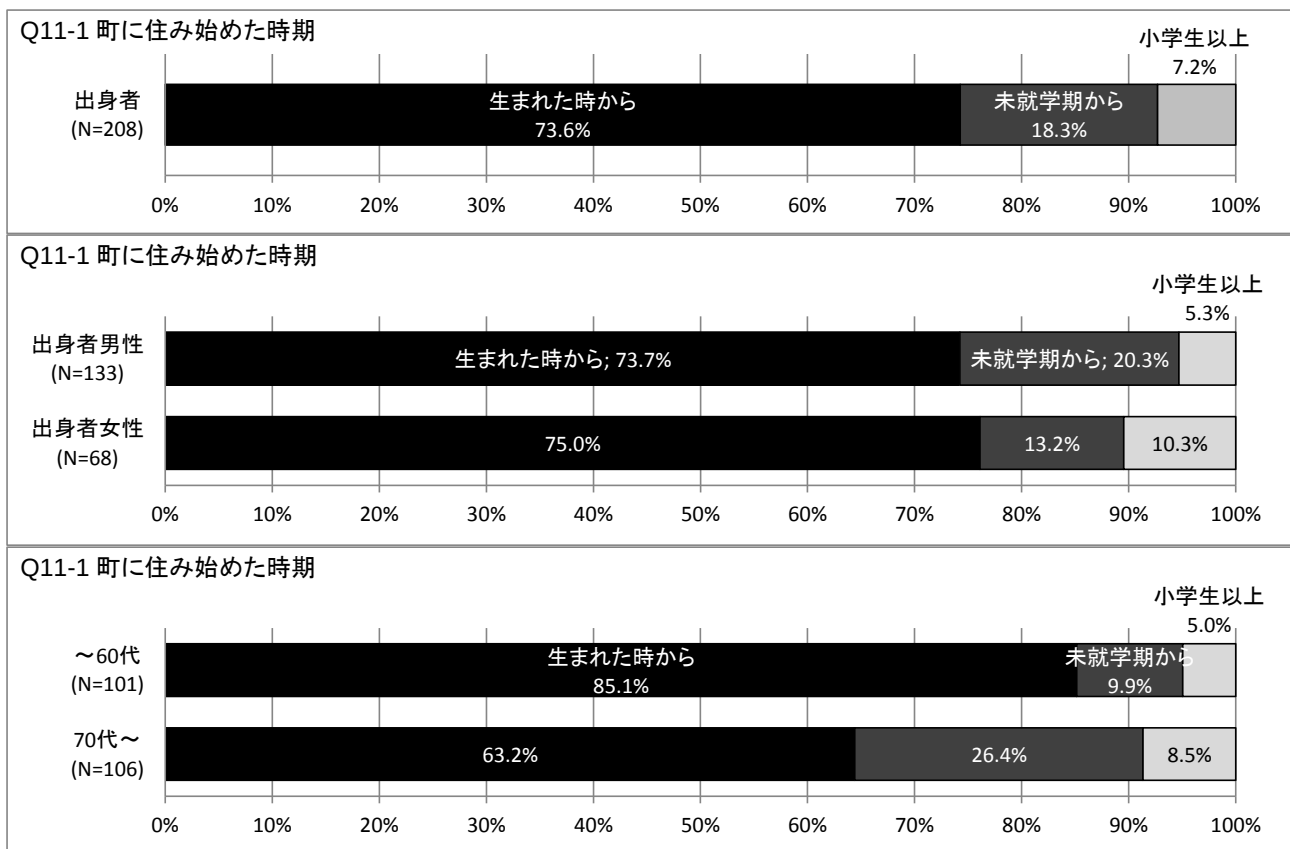
- 小国町に住んでいた時の居住地区をみると、約6割が「旧小国町」である。



Q11 あなたが小国町に住んでいた時期を教えてください。(年齢でお答えください。)

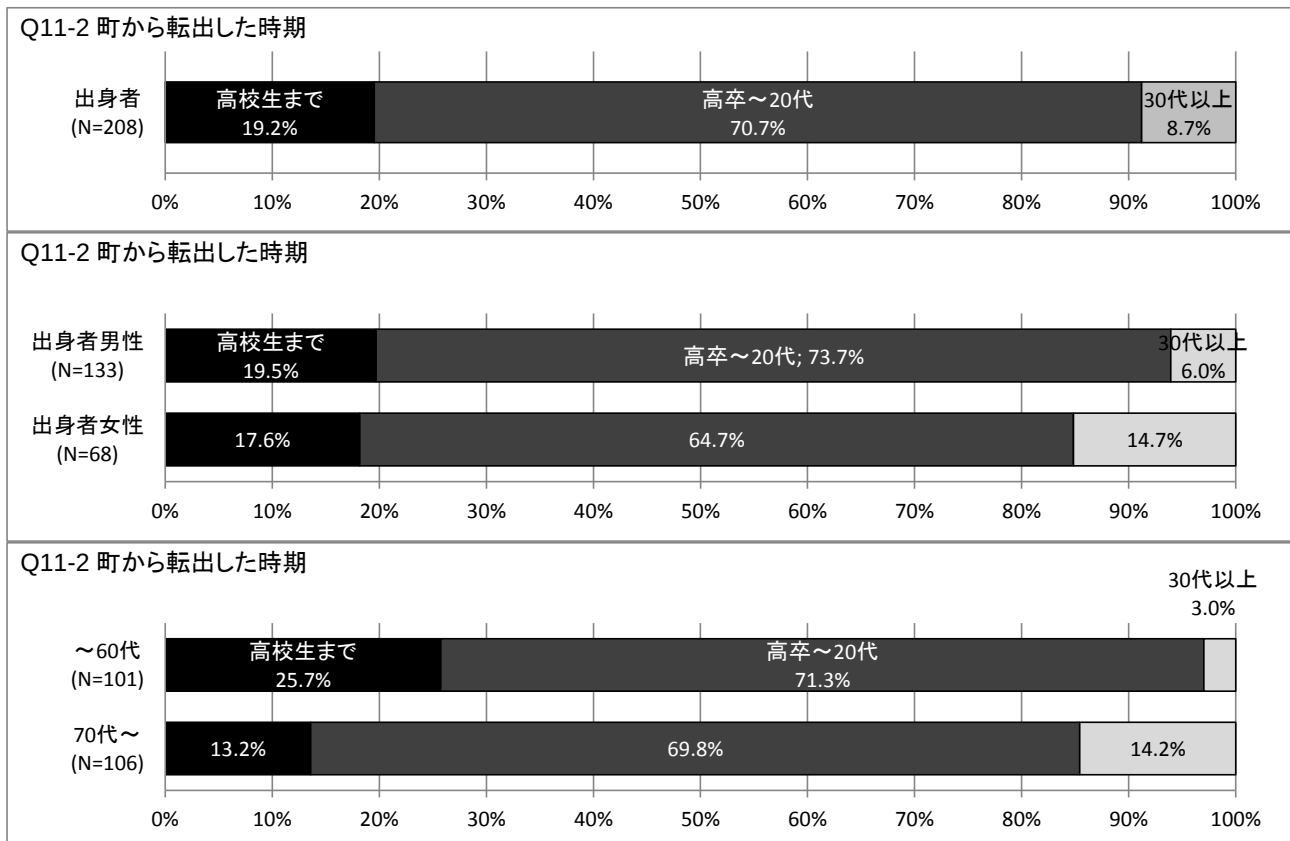
【住み始めた時期】

- 小国町に住み始めた時期をみると、「生まれた時から」が7割超と大部分を占めている。
- 性別で比較すると、男女とも7割超が「生まれた時から」としているが、男性は「未就学期から」が約2割を占めているのに対して、女性は「小学生以上」と比較的成長してから町に転入した人が1割程度みられる。
- 世代別で比較すると、60代までは「生まれた時から」が大部分を占めているのに対して、70代以上では、「未就学期から」が26.4%と高い割合となっている。



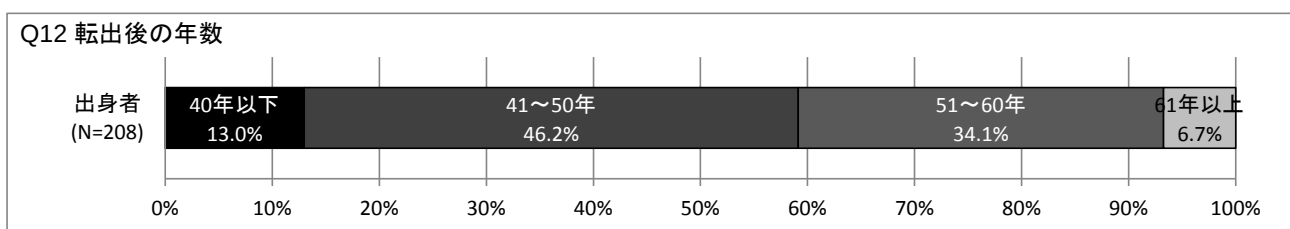
【転出した時期】

- 小国町から転出した時期をみると、全体では、高校卒業以降 20 代のうちに転出した人が 7 割を占めている。
- 性別で比較すると、30 代以上になってから転出した人の割合は女性の方が男性より倍以上大きくなっている。
- 世代別で比較すると、60 代までの世代では、高校生までの間に、すなわち就学期のうちに転出した人が 4 分の 1 を占めている。



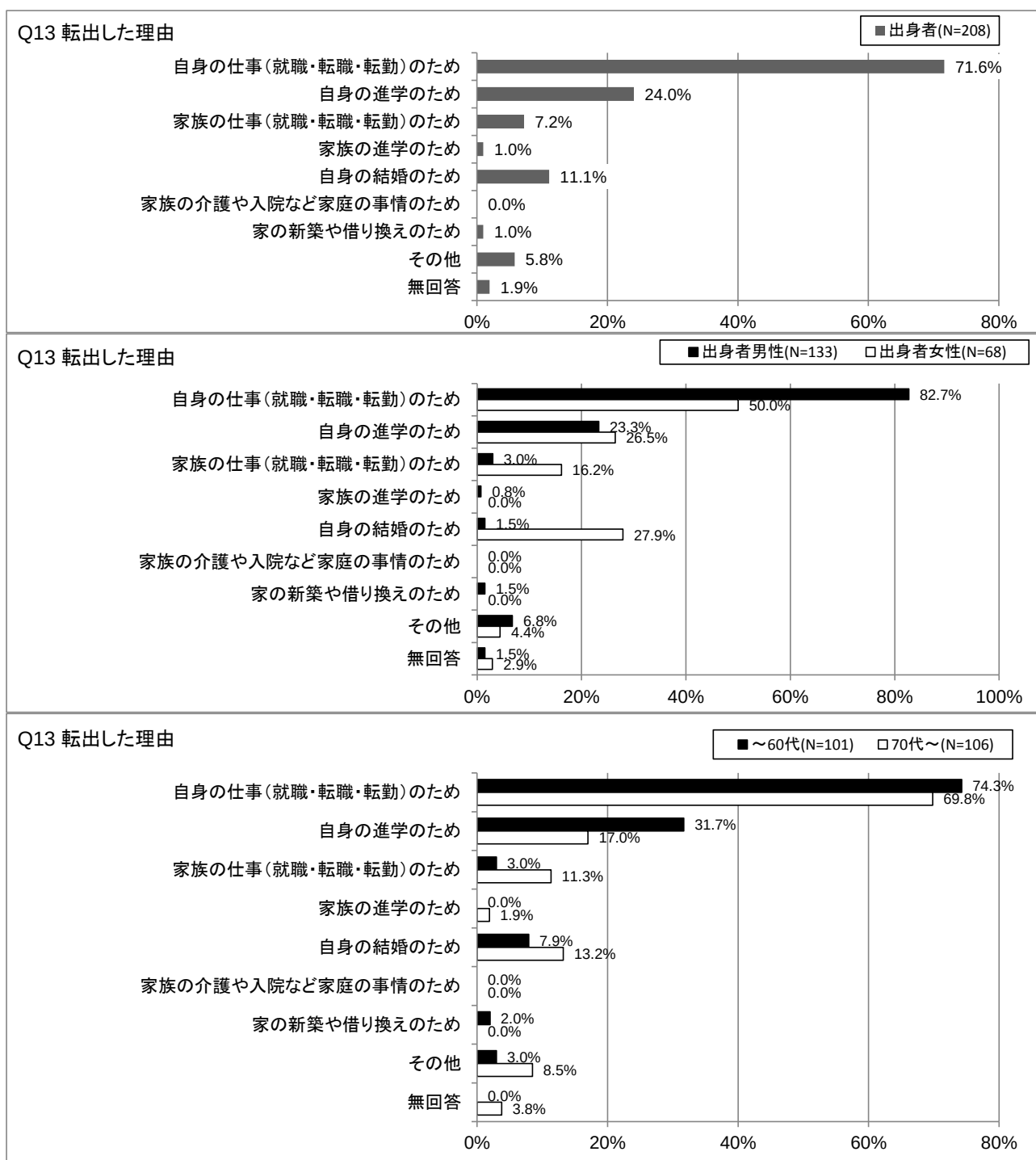
Q12 転出してからどのくらい経ちましたか。(年数でお答えください。)

- 転出後の年数は「41～50 年」が半数近くと最も多く、次いで「51～60 年」が 3 分の 1 強となっている。



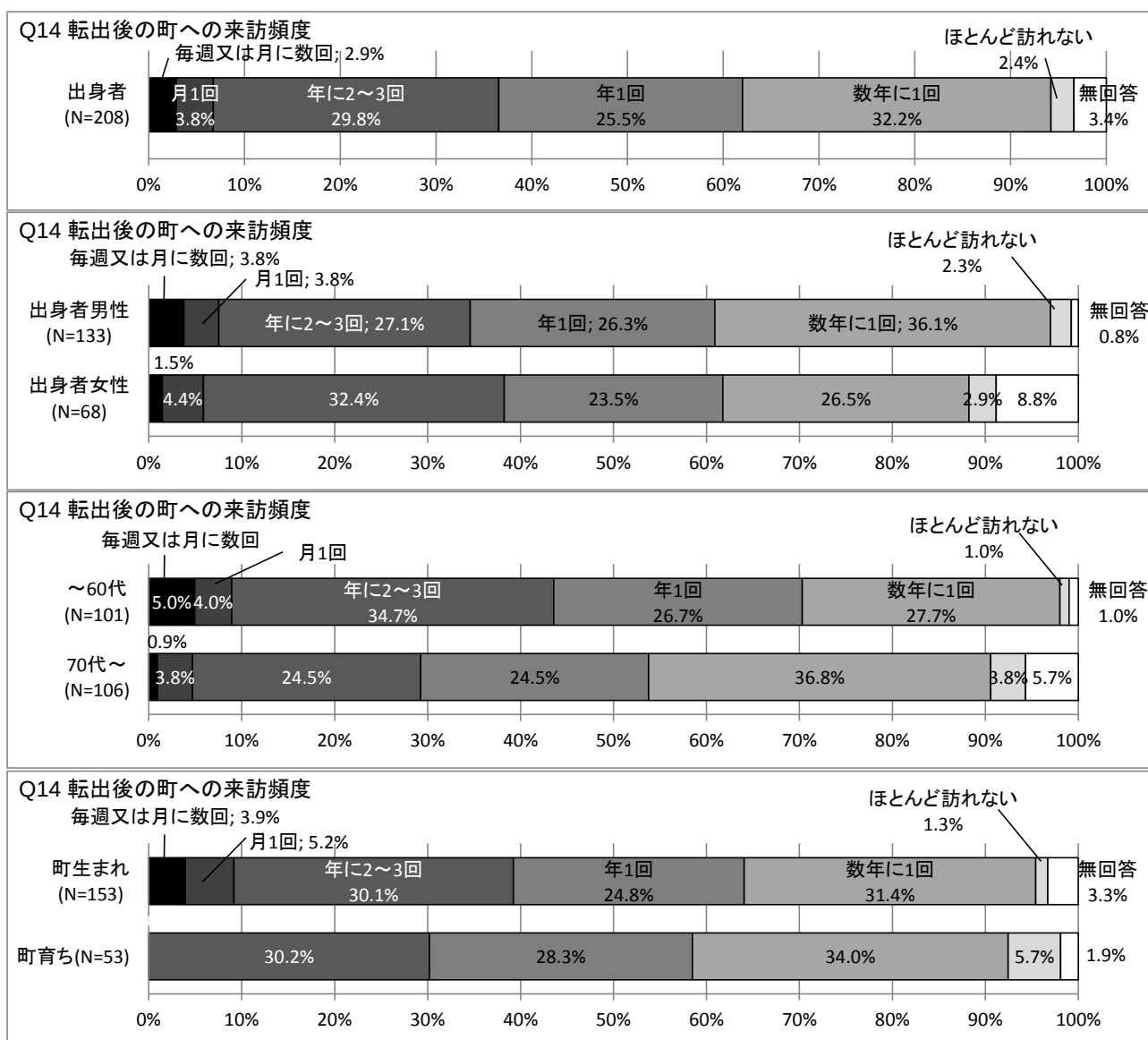
Q13 あなたが小国町から転出したきっかけや理由は何ですか。(〇はいくつでも)

- 転出理由は7割超が「自身の仕事のため」と突出している。
- 性別でみると、男性では「自身の仕事のため」が8割を超えている一方、女性は「自身の結婚のため」も3割弱みられる。
- 世代別でみると、60代までの世代では「自身の進学のため」の割合が70代以上よりも高く、より若い世代では進学のために転出したケースが増えていることがうかがえる。



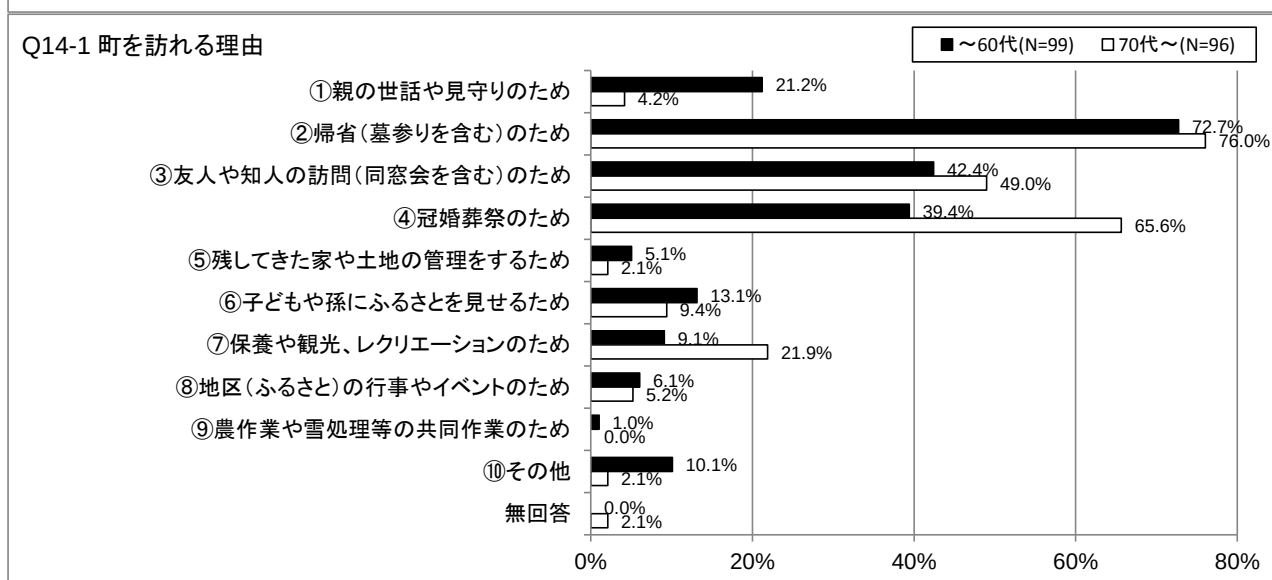
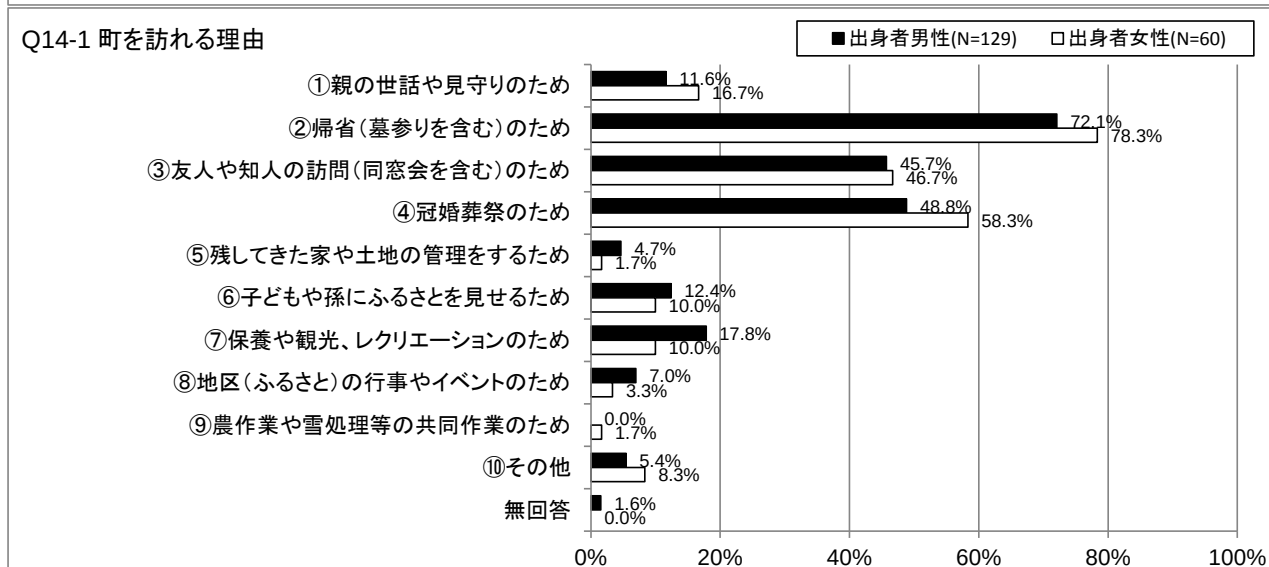
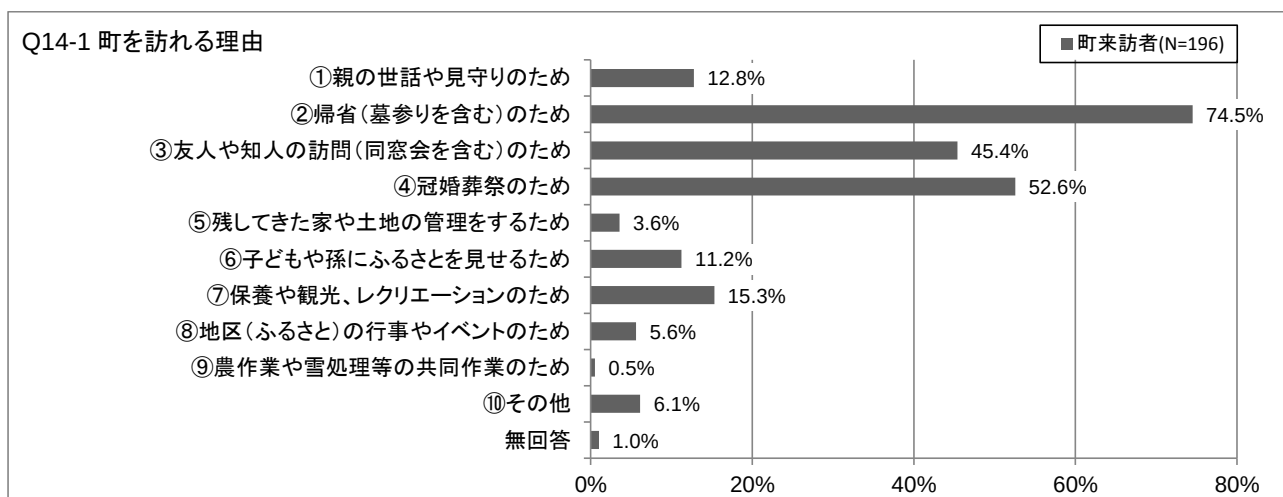
Q14 あなたは、転出された後どのくらいの頻度で小国町を訪れていますか。(〇は1つ)

- 転出後の町への来訪頻度をみると、全体では年に1回以上訪れる人が6割を超えている。
- 性別で比較すると、「年に2～3回」は女性の方が多く、「数年に1回」は男性の方が多い。
- 世代別でみると、60代までの世代では「毎週又は月に数回」と頻繁に町を訪れる人も5%程度みられる。
- 町生まれか町育ちかで比較すると、町生まれの人の方が来訪頻度は高くなっている。



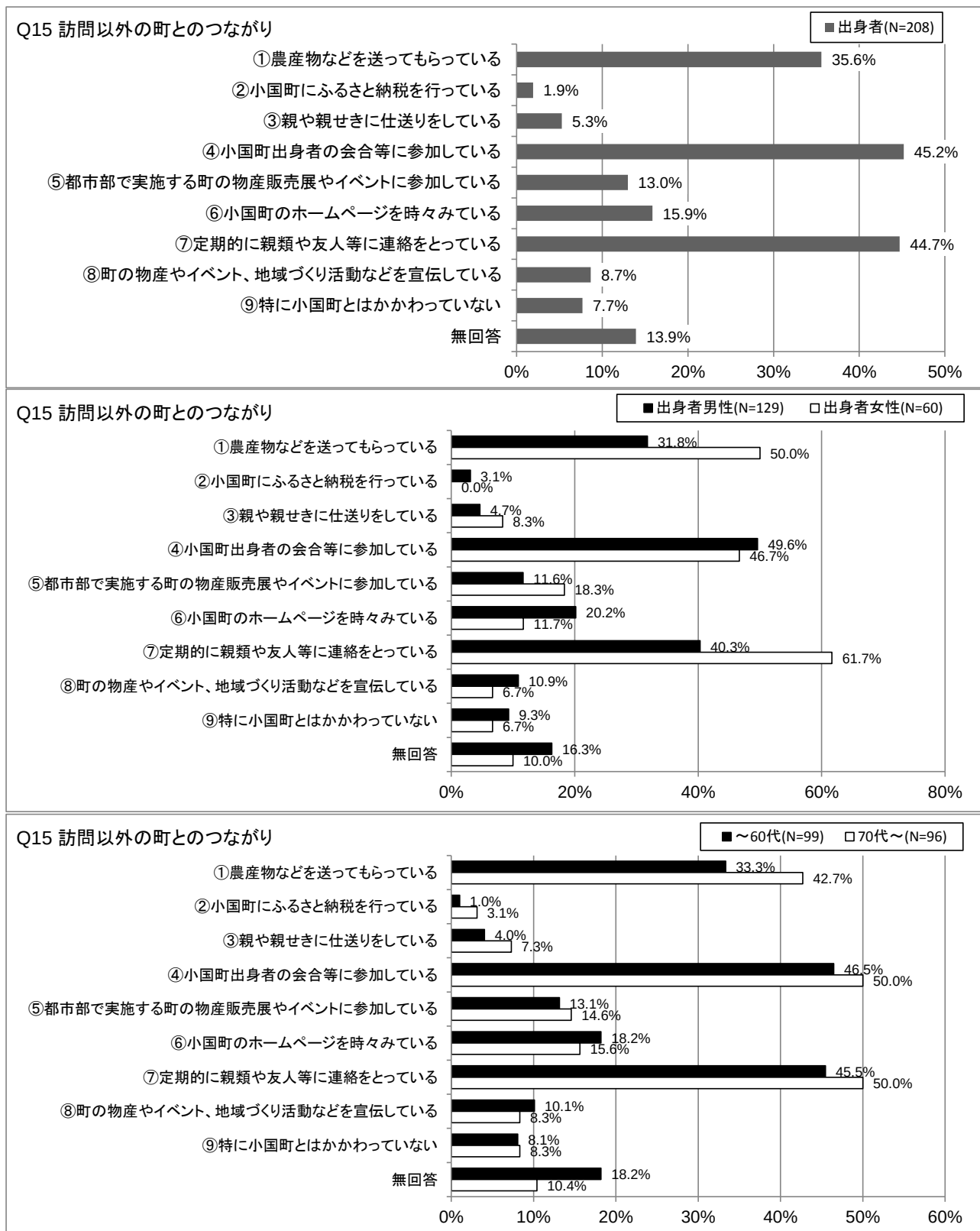
Q14-1 Q14で①～⑤を選択した方に伺います。転出後の小国町への訪問理由は何ですか。(〇はいくつでも)

- 来訪理由は「帰省」と「冠婚葬祭」が半数以上から挙げられており、特に 70 代以上では「冠婚葬祭」のために町を訪れる機会が多いことがうかがえる。



Q15 訪問以外に、小国町とのつながりがありますか。(〇はいくつでも)

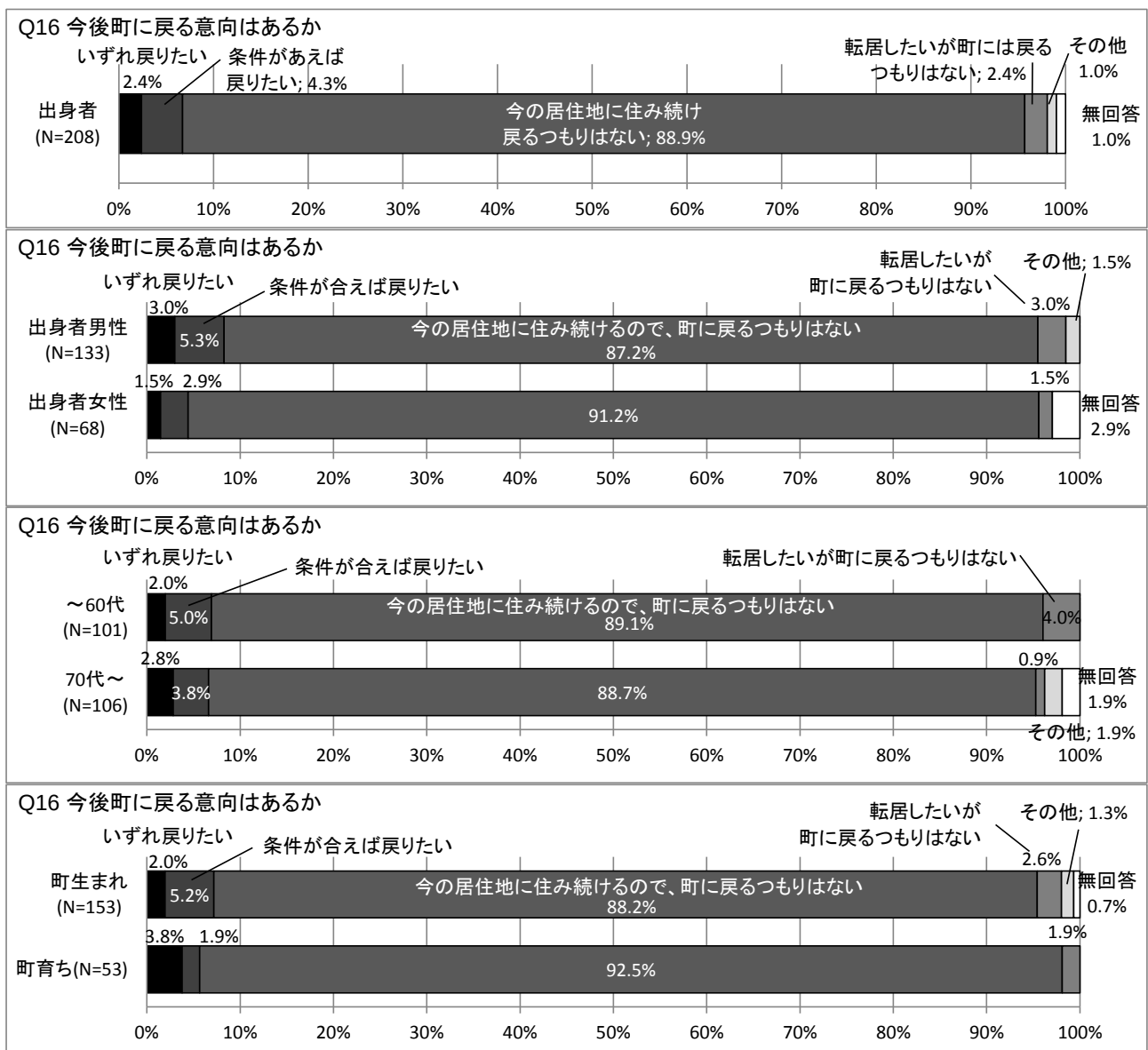
- 訪れる以外での町とのつながりとしては、「小国町出身者の会合等に参加している」「定期的に親類や友人等に連絡をとっている」「農産物等を送ってもらっている」等が多くみられる。



(4) 今後の小国町との関わりに関する意向

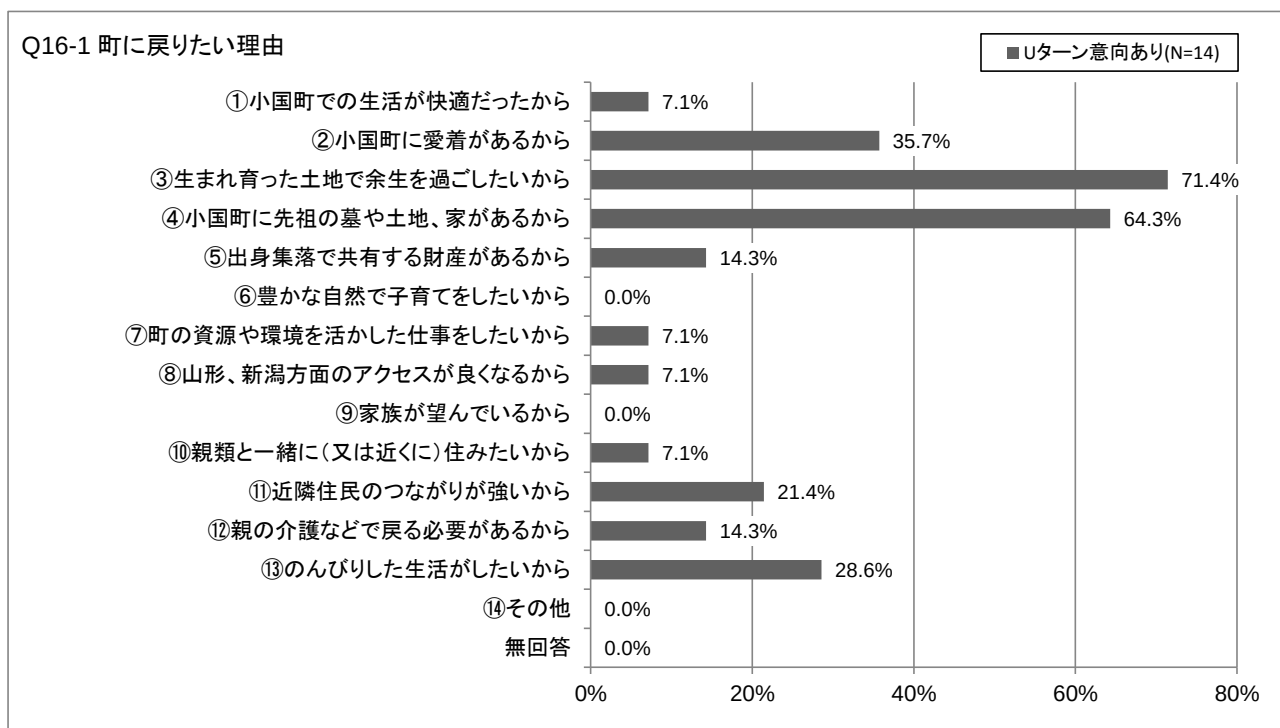
Q16 将来、小国町に戻る意向はありますか。(〇は1つ)

- 町への U ターン意向をみると、9 割近くの人が「今の居住地に住み続け、町に戻るつもりはない」としている。
- 男女で比較すると、男性の方が戻りたいと思っている人が若干多いが、世代ではあまり大きな違いは見られない。
- 町生まれの人は 5.2%が「条件が合えば戻りたい」としているのに対して、町育ちの人が「いずれ戻りたい」が 3.8%と、町生まれの人よりも若干高い割合となっている。



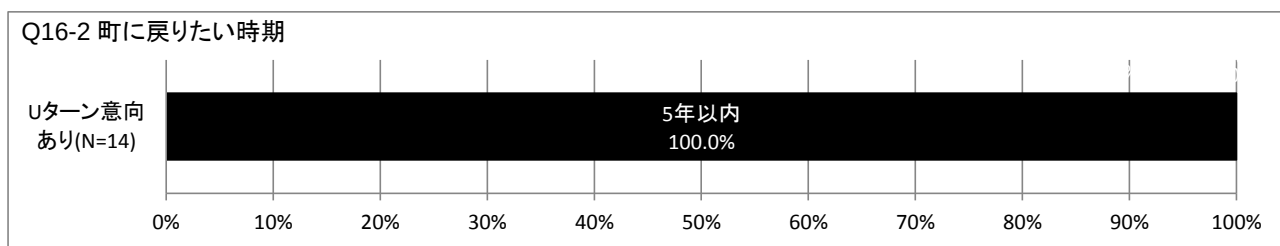
Q16-1 Q16で①または②を選択した方に伺います。小国町に戻りたいと思う理由は何ですか。(〇はいくつでも)

- 町への U ターン意向を示した人(「いずれ戻りたい」+「条件が合えば戻りたい」)にその理由を聞くと、「生まれ育った土地で余生を過ごしたいから」が7割超、「町に先祖の墓や土地、家があるから」が6割超と特に多くなっている。
- これらの他には、「小国町に愛着があるから」や「のんびりした生活がしたいから」などが比較的高い。



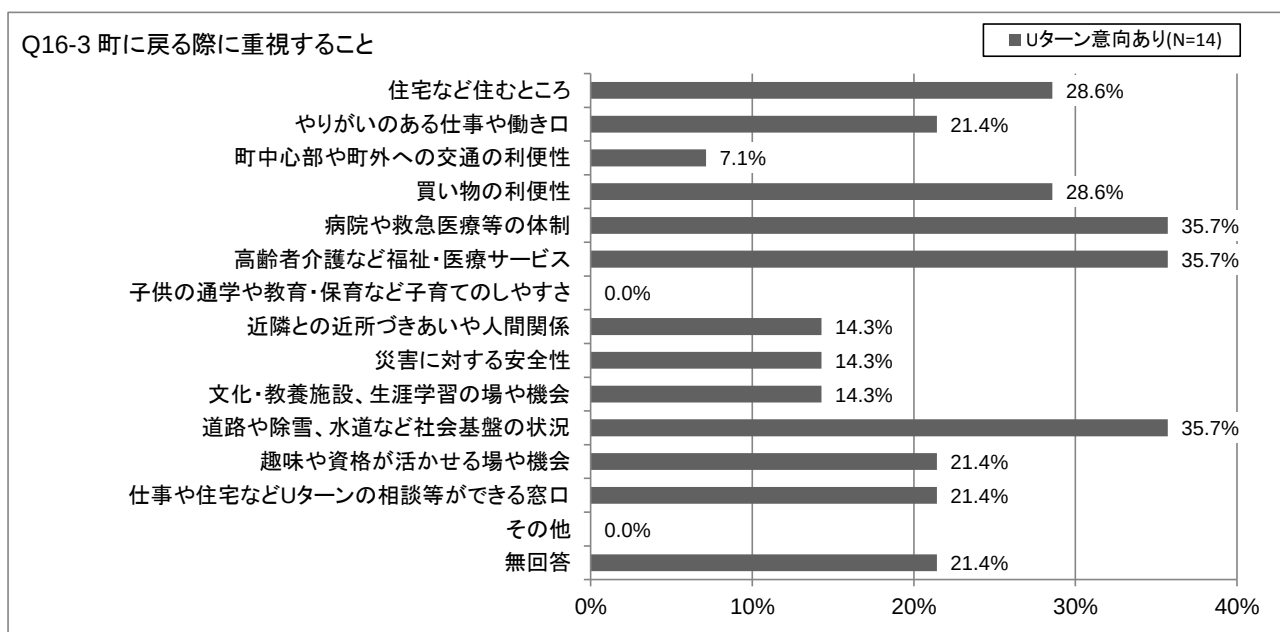
Q16-2 Q16で①または②を選択した方に伺います。いつごろ小国町に戻りたいと思いますか。(〇は1つ)

- 町に戻りたい時期については、全員が「5年以内」と回答している。



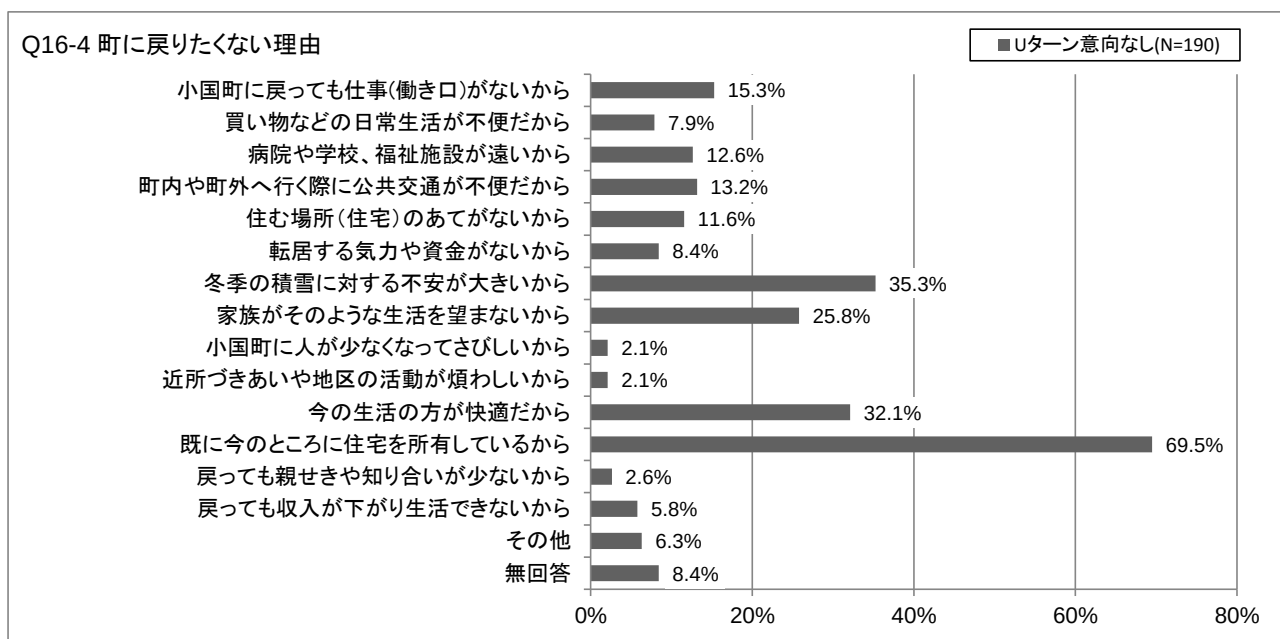
Q16-3 Q16で①または②を選択した方に伺います。小国町に戻る際に重視することは何ですか。(〇は
いくつでも)

- 町に U ターンする際に重視することとしては、「病院や救急医療等の体制」「高齢者介護など福祉・医療サービス」「道路や除雪、水道など社会基盤の状況」が比較的高い割合となっている。



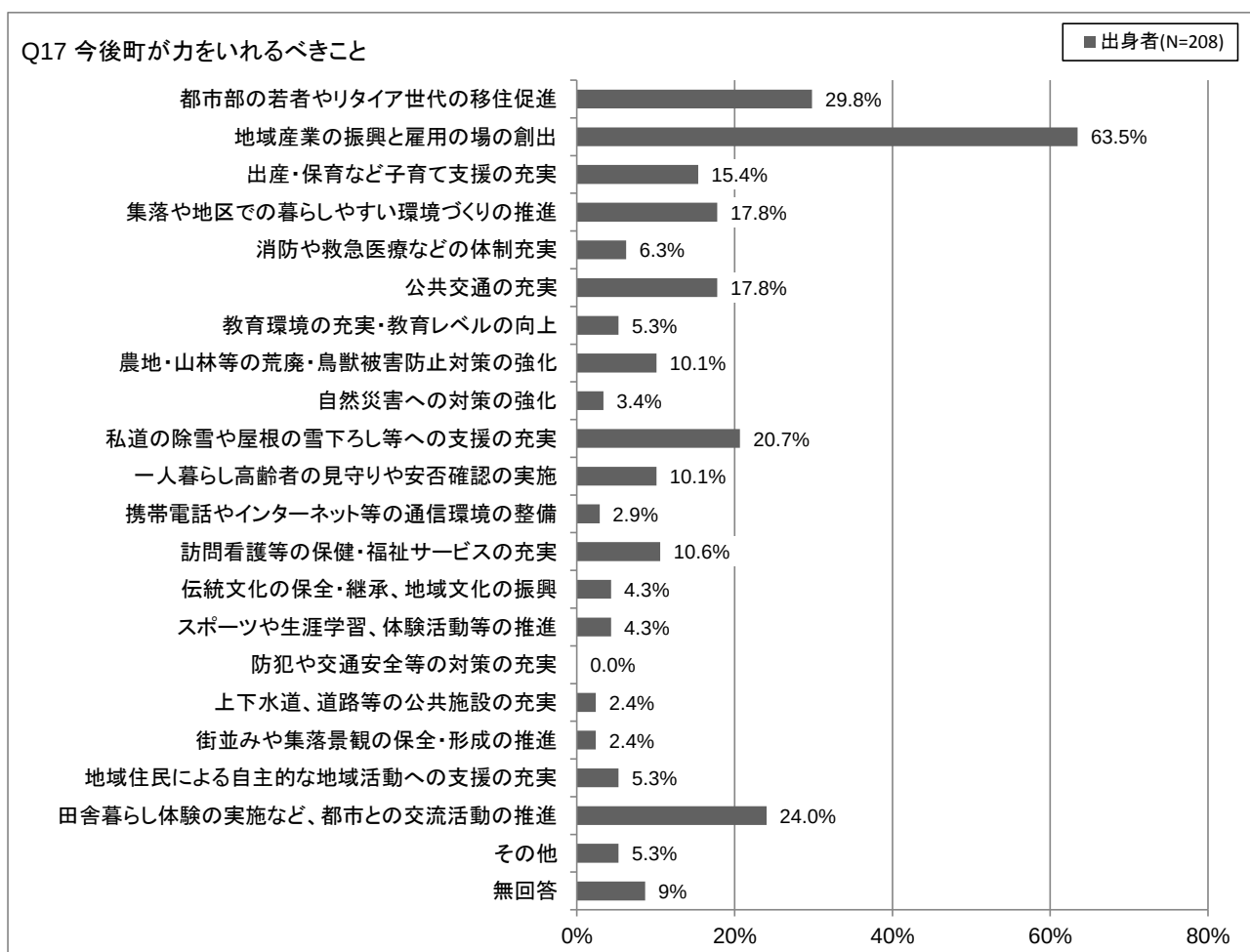
Q16-4 Q16で③または④を選択した方に伺います。小国町に戻りたいと思わない理由は何ですか。(〇
はいくつでも)

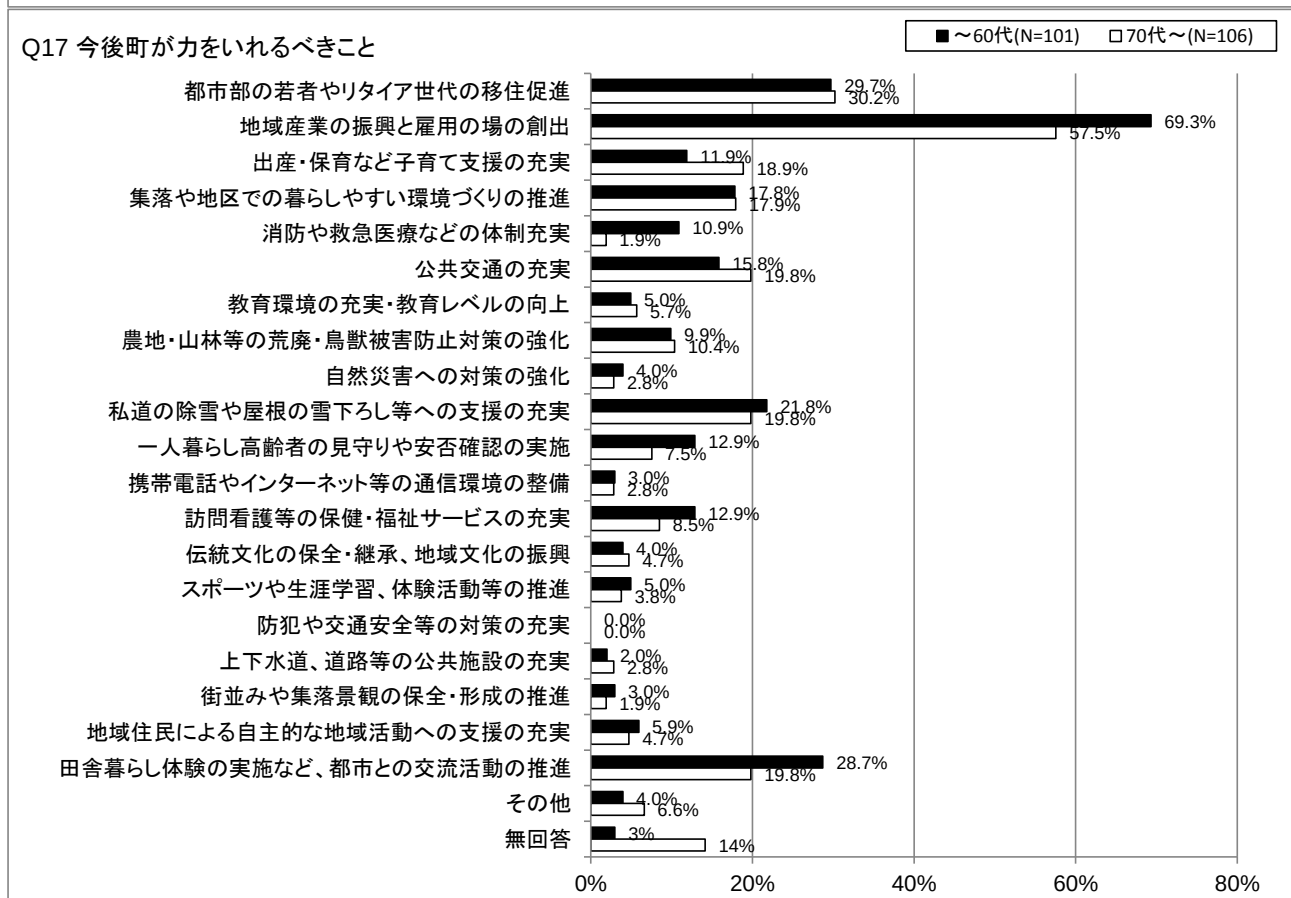
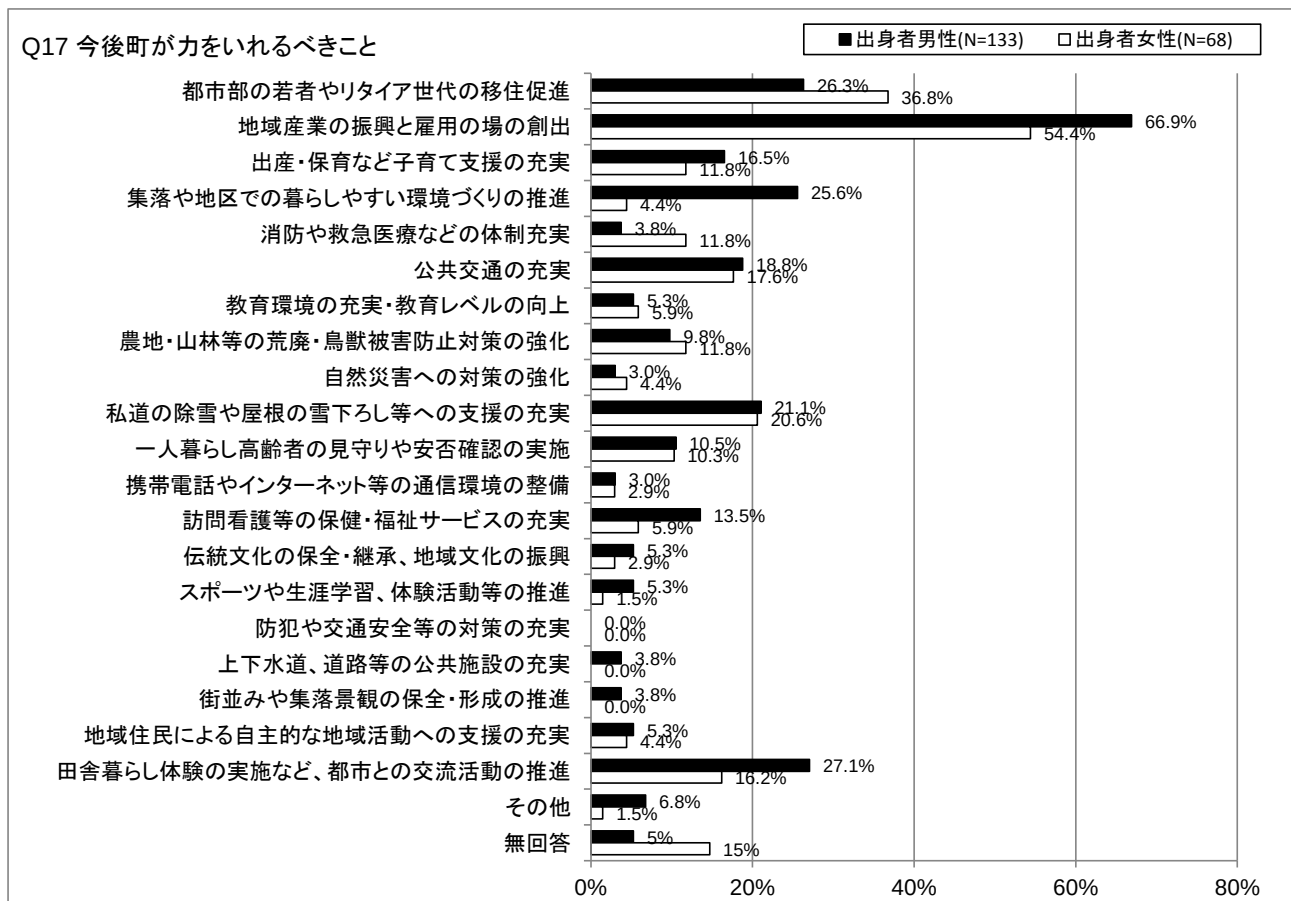
- 町に戻るつもりはないと回答した人に対し、その理由を聞いたところ、「既に今のところに住宅を所有しているから」が約7割と突出しており、その他には、「冬季の積雪に対する不安が大きいから」「今の生活の方が快適だから」等が比較的高い割合となっている。



Q17 あなたは、これからの小国町のまちづくりにおいて、どのようなことに力を入れるべきだと思いますか。

- 今後の小国町のまちづくりに対しての町出身者の意見をみると、全体としては「地域産業の振興と雇用の場の創出」に力を入れるべきとの声が6割以上と最も多く聞かれている。
- この他には、「都市部の若者やリタイア世代の移住促進」や「田舎暮らし体験の実施など、都市との交流活動の推進」等が比較的多くみられる。
- 「地域産業の振興と雇用の場の創出」や「田舎暮らし体験の実施など、都市との交流活動の推進」については男性からより多く指摘されており、女性は「都市部の若者やリタイア世代の移住促進」に力を入れるべきとの意見が男性よりやや多い。
- また「地域産業の振興と雇用の場の創出」については、60代までの世代の方がより多く指摘している。

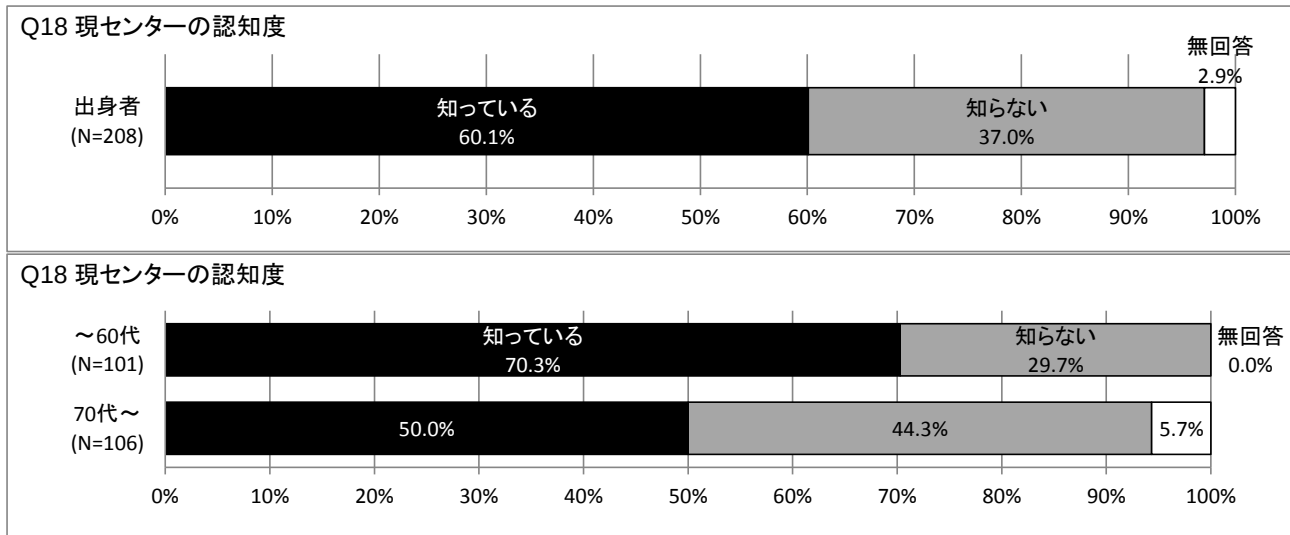




(5) まちづくりの拠点施設について

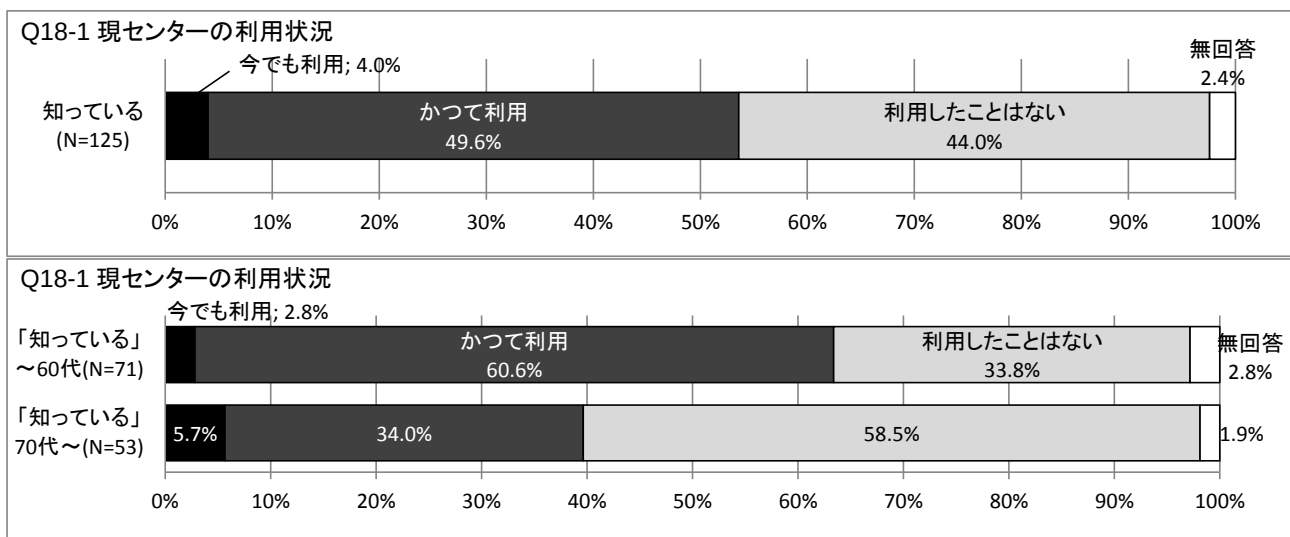
Q19 あなたは、“おぐに開発総合センター”を知っていますか。(〇は1つ)

- 町出身者の約6割は現センターのことを知っており、60代までの比較的若い世代の方が認知度は高い。



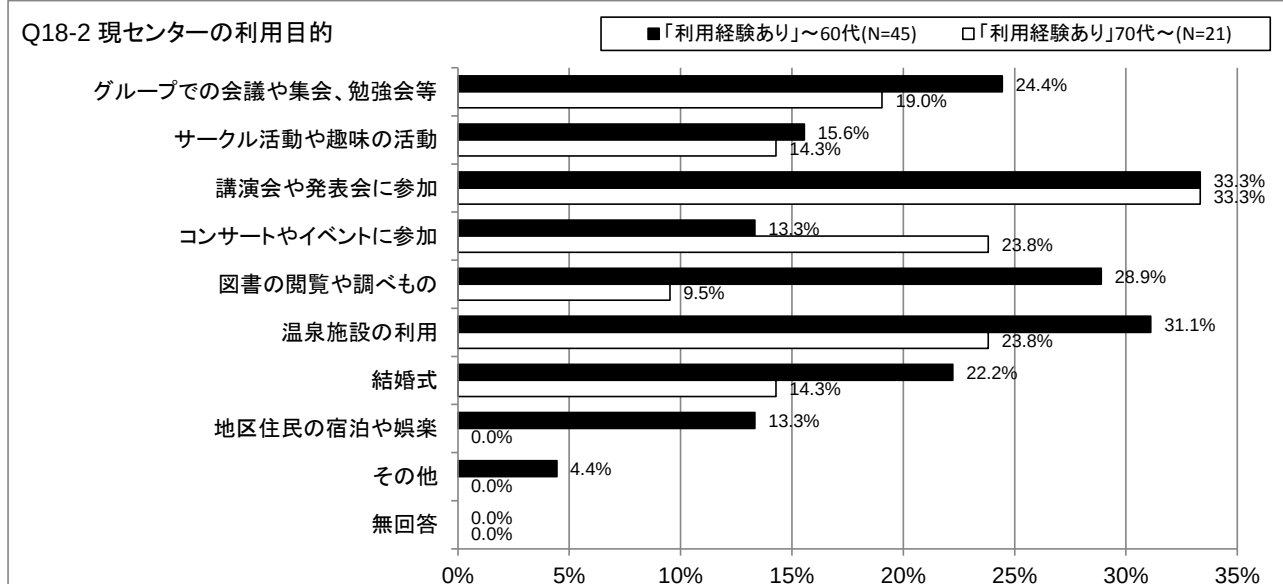
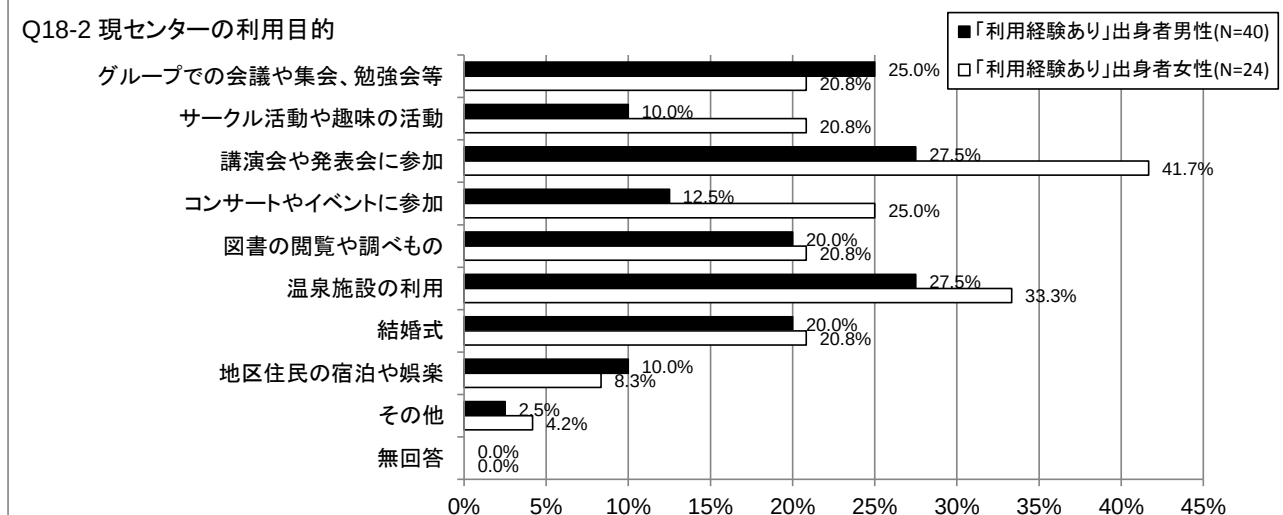
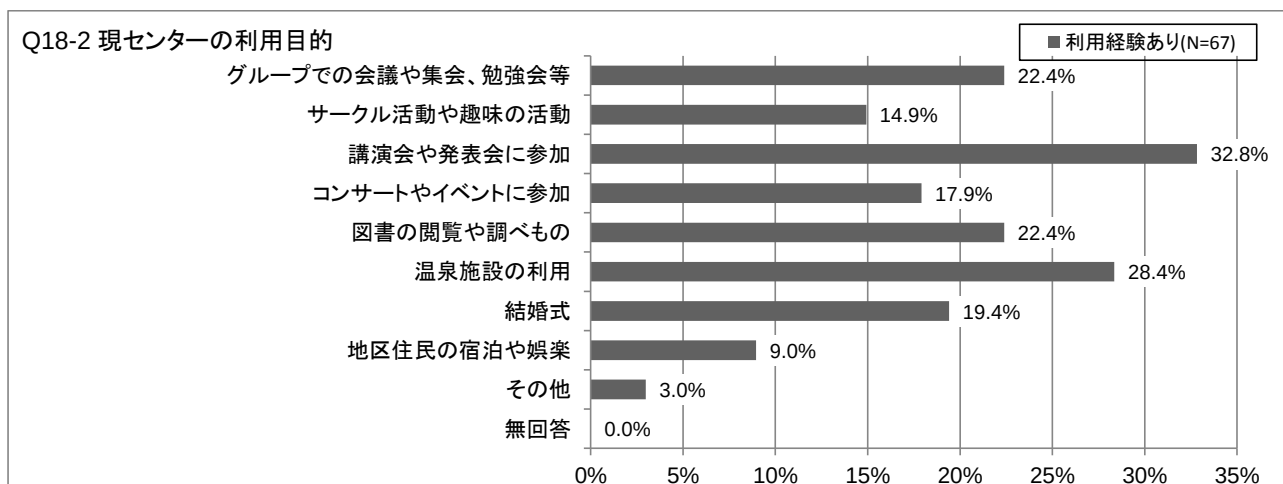
Q19-1 あなたは、おぐに開発総合センターを利用したことがありますか。(〇は1つ)

- 現センターを「知っている」町出身者の約半数は、「かつては利用していた」としている。
- 利用状況についても、60代までの世代では6割超が「かつては利用していた」としており、70代以上よりも高い利用状況を示している。



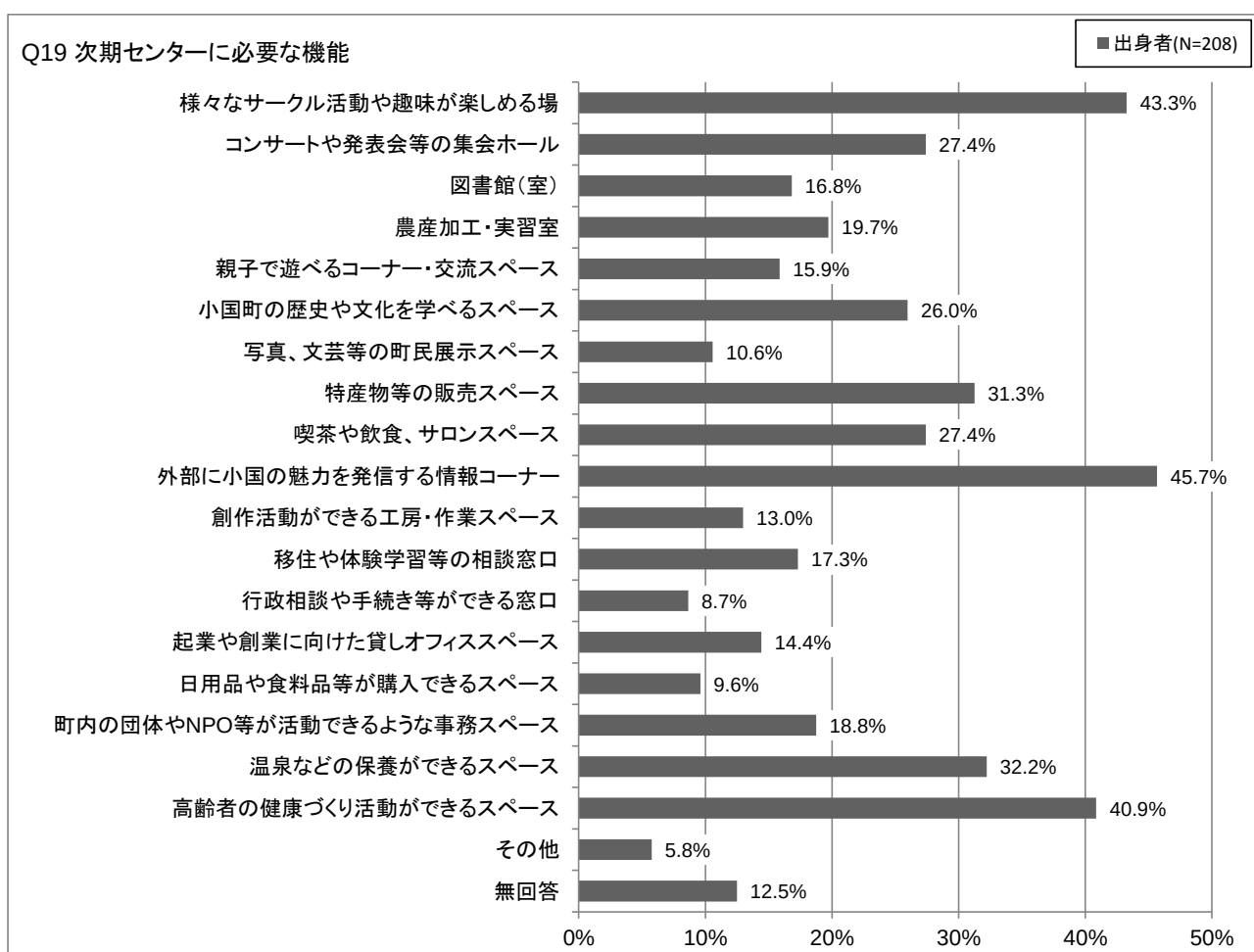
Q19-2 Q19-1で①または②を選択した方に伺います。どのような目的で利用しましたか。(〇は3つまで)

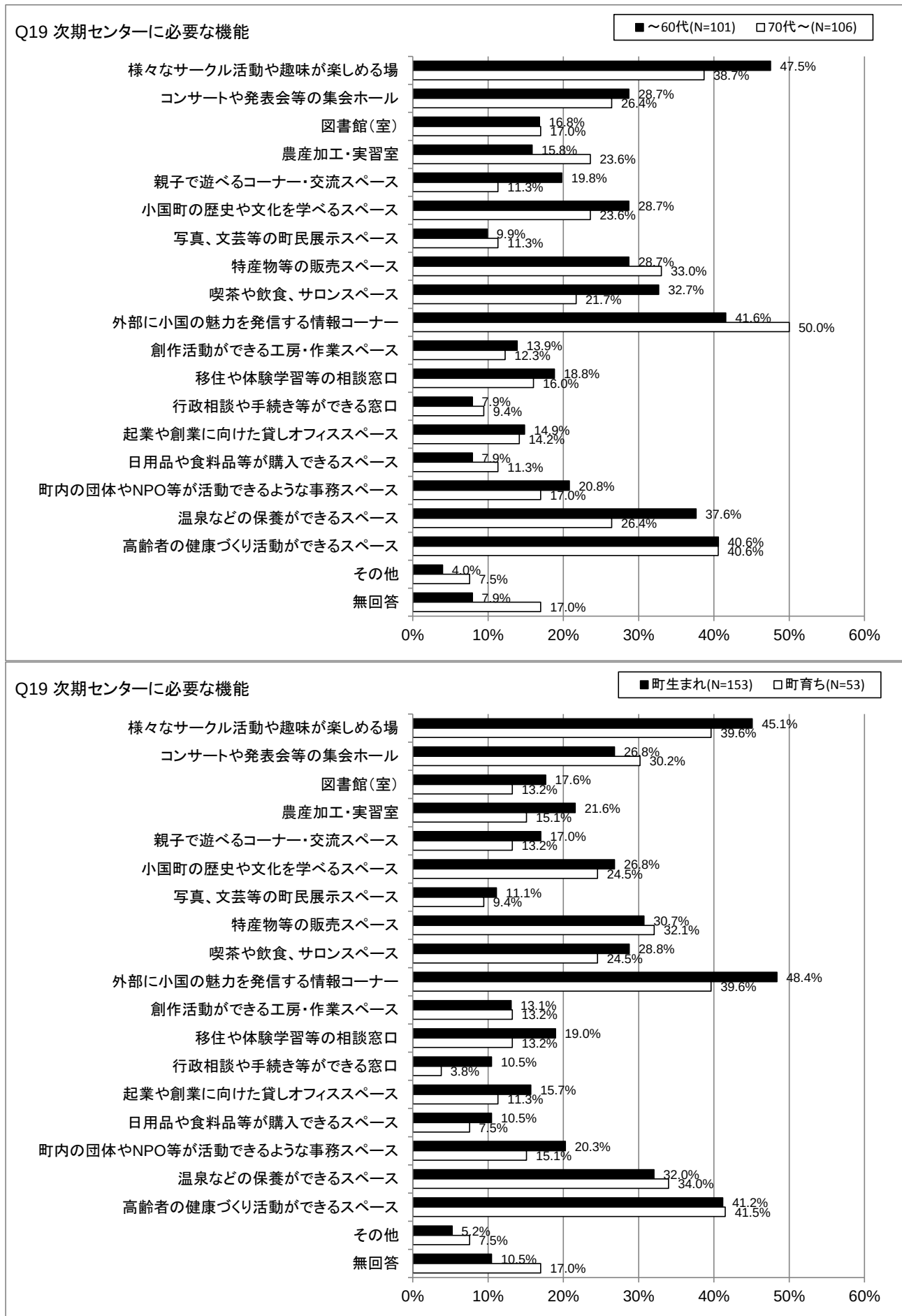
- 現センターの利用目的をみると、「講演会や発表会に参加」が最も多く、次いで「温泉施設の利用」や「グループでの会議や集会、勉強会等」、「図書の閲覧や調べもの」の順となっている。
- 「講演会や発表会に参加」は女性で特に高い割合となっている。



Q20 あなたは、小国町にこれからのまちづくりの拠点となる施設をつくるとしたら、どのような機能が必要とお考えですか。(〇はいくつでも)

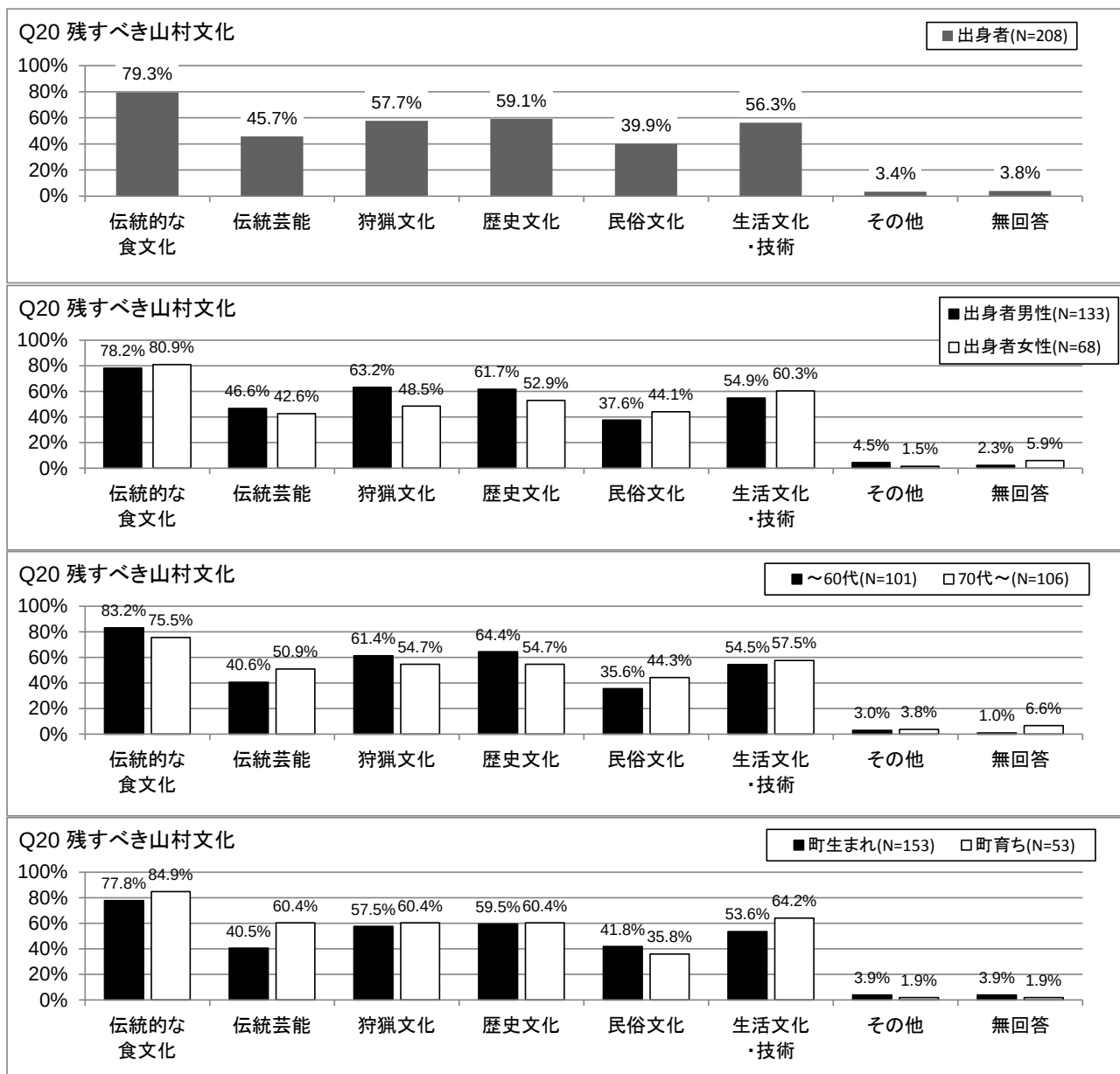
- 町出身者からみて、次期センターに必要な機能として最も多く挙げられたのは、「外部に小国の魅力を発信する情報コーナー」であり、次いで「様々なサークル活動や趣味が楽しめる場」、「高齢者の健康づくり活動ができるスペース」等が多くなっている。
- 年代別でみると、「外部に小国の魅力を発信する情報コーナー」を求める声は 70 歳以上の出身者の方がより高く、逆に「様々なサークル活動や趣味が楽しめる場」は 60 歳までの世代の方がより高い割合となっている。





Q21 小国町には全国的にみても独特な山村文化があります。こうした小国町の文化のうち、あなたが後世に残したいと思うものは何ですか。(〇はいくつでも)

- 町独自の山村文化で後世に残すべきものとして、町出身者の約8割が「伝統的な食文化」を第1位に挙げており、次いで「歴史文化」や「狩猟文化」、「生活文化・技術」が5割以上と比較的高い割合となっている。
- 男女別でみると、わずかな差ではあるが、「歴史文化」や「狩猟文化」は男性の方が、「伝統的な食文化」や「生活文化・技術」は女性の方が高くなっている。
- 出身別で比較すると、上位項目はいずれも町生まれの人よりも町育ちの人の方がわずかながら高い割合となっている。



Q22 小国町独自の山村文化を後世に継承していくためにはどのような取組が必要とお考えですか。(〇はいくつでも)

- 町独自の山村文化を後世に残すために必要な取組としては、「学校教育の中で子どもたちに伝えていく」とする回答が最も多く、約3分の2がこれを挙げている。このほか、「山村文化の担い手の活動を支援する」や「体験交流や観光により産業振興につなげる」、「転入者を増やして担い手を確保する」などが一般住民と比べて高い割合となっている。
- 世代別でみると、60代までの世代の方が様々な取組について必要とする人の割合が高く、特に産業振興につなげることや担い手の確保が必要という意見が70代以上の世代よりも多い。

